

## 魔術師シモンとフォロ・ロマーノの「石」をめぐる試論

—トウスカニア、サン・ピエトロ旧司教座聖堂壁画を手がかりに—

伊藤 怜 (早稲田大学)

「すべての異端の父」とみなされた魔術師シモンに関する言及は、使徒言行録から、教父による著作、聖書外典、説教集など多岐にわたって認められる。シモンは、初期キリスト教美術以来、中世を通じて、単独場面または使徒ペテロ伝サイクルというコンテクストで壁画、彫刻、写本挿絵に表されており、絵画表現の主要な典拠としては、聖書外典『ペテロ行伝』と『使徒ペテロとパウロの殉教録』（以下、『殉教録』）がある。

ラツィオ州トウスカニアのサン・ピエトロ旧司教座聖堂は、11世紀末頃の制作とみなされるモニュメンタルな壁画装飾を有し、内陣北壁面には、使徒言行録と『殉教録』を典拠とする、ペテロ伝サイクル6場面が配される。最終場面には、シモンの最期についての「魔術師シモンの飛行と墜落」が描かれ、墜落したシモンの下方に円形モチーフが確認できる。このモチーフは、シモンの身体半分ほどの大きさで画面中央に表され、見る者に注意を促す。先行研究では、ローマの聖堂装飾との様式的類似性やモチーフの指摘に関心が払われ、トウスカニアのペテロ伝は伝統的図像を踏襲したサイクルととらえられた。円形モチーフの存在に関しては、ヴィーヤールが指摘したのみだが、その考察は細部には及んでいない。

本発表では、トウスカニアの典拠とされるラテン語版『殉教録』に注目し、円形モチーフが死後に「石」と化した魔術師シモンと考えられることを明らかにする。さらに、トウスカニアの作例を手がかりとして、初期中世から中世末期の史料を確認し、中世ローマにおける「石」の表象に関する考察を試みる。

ラテン語版『殉教録』の本文と補遺は、サタンの助けで空を飛び始めたシモンが、ペテロの祈りによって、フォロ・ロマーノの中心にあるヴィア・サクラという通りに落ち、四片に砕け、地面の四つの石と結合して、「石」となり、それらの「石」は使徒の勝利の証とされたと伝えている。典拠に従えば、トウスカニアのモチーフを「石」と化したシモンの象徴的表現とみなすことができよう。

さらに、トゥール司教グレゴリウスの『殉教者の栄光』、『歴代教皇録』、『政治の書』、ペトラルカの書簡などでは、シモンを落とすためにペテロとパウロが祈った際に膝をついた「石」との混同があるものの、シモンの「石」は中世ローマで一種の聖遺物として機能していたと確認できた。『政治の書』には、復活祭後の月曜に行われた行列で、ローマ教皇がフォロ・ロマーノの「石」に上っていたという記述があり、「石」には象徴性が与えられていたと考えられる。以上の考察から、トウスカニアで確認された「石」は、魔術的力に対する使徒たちの勝利を想起させるモチーフとして、中世ローマ的コンテクストにおいて理解され得るのである。